

# 「心の花」新・百人一首(一)

\* 「心の花」創刊一〇〇年記念号以来の「新・百人一首」である。

\* 百人の選出に当たっては、黒岩剛仁、田中拓也、清水あかね、佐佐木定綱の四名で検討し、佐佐木幸綱先生のご意見を伺いつつ決定した。その責は黒岩にある。

\* 各歌人の選歌・コメントは、黒岩、田中、清水、定綱に加え、青山仁、梅原ひろみ、加古陽、河野千絵、服部崇、原才、御手洗靖大の十一名がそれぞれ担当した。

## 1 秋風の札幌大路／旅人が白き衣の うらさびしけれ

石樽千亦 (明治二〜昭和一七)

歌集『潮鳴』(大正四年)所収。水難救済会の理事という職業柄、海を題材にした歌が多かったため、「海の歌人」とも称される石樽千亦。彼はとりわけ北海道の海や風土を愛し、多数の歌を遺したが、この歌はその中でも異色の作品である。「白き衣」の旅人は千亦自身のことと思われるが、この旅人の「うらさびしけれ」という描写に、どんなに北海道を愛していても、所詮自分は他郷の人間なのだ、という気持ちにがにじみ出ている。(青山)

## 2 ぼつかりと月のぼる時森の家の寂しき顔は戸を閉ざしける

佐佐木信綱 (明治五〜昭和三八)

『新月』(大正元年)の超現実派風の一首。夜空に煌々とのぼる月と、戸を閉ざして闇となつて森の家の明度の対比。どこの森か、だれの顔か、物語があるのか、謎に満ちている。「ぼつかりと」という口語的オノマトペを取り入れているのが特徴的である。大岡信の『折々のうた』などにも引用されている代表歌の一つ。

(佐佐木定)